

「私の研究をわかってもらおう」とはどういうことか ～多言語状況における発話と翻訳

加藤 恵津子（国際基督教大学准教授）

人の生活は必然的に多言語状況にある。私たちは様々な意味で「異なる言語」の間を行き来しながら、日々の生活を送っている。それは、国境をまたいで日常生活を営む人びとや、多言語主義をとる国家に暮らす人びとに限らない。日本のような「単一言語」主義の国家に暮らしていても、「同じ日本語」の中の書き言葉と話し言葉、専門家言語と日常言語、丁寧語とくだけた言語などを使い分けずに、一日を終えることは難しい。言い換えれば、人は「発話」（ここでは話すことと書くことの両方を含む）の際に、必然的に、複数言語の中からその状況にもっともふさわしいものを選んでいくことになる。時には「同じ」内容を、異なる状況で、ふさわしい言語に「翻訳」して発話しなおすこともある（僧侶が、大人向けと子ども向けに、同じ説法を異なる言い方をするなど）。いずれにしても人が社会生活を営むことは、多言語状況を生きていくことと同義であると言える。

研究者も、そんな人間たちの一グループである。研究は、調査し思考することを主要素とするのはもちろんだが、それと同じくらい、その内容を文字ないし音声を使って発話することも、仕事の本質とする（逆に言うと、何かを調べて考えることしかしない人は研究者とは言えない）。しかもその発話は、学生のレポートにありがちなように「自分がわかるように」すれば良いわけではない。研究者は、自分の研究を「わかってもらおう」よう（英語のmake oneself understood、直訳すると『理解されるように・自分を・作る』という熟語は、このニュアンスをよく伝えているように思う）発話する必要がある。その時、多言語状況の中で、その時々読者ないし聴衆、状況、目的などに合わせて、もっともふさわしい言語を選ぶことは必至である。

だが筆者は、「自分の研究をわかってもらおう」ことが単純なことではないと思える体験を、少なくとも

二度している。一度目は、「同じ」研究を英語と日本語で出版した時。二度目は自分の考えを、日本語で、一般公開のシンポジウムで口頭発表した時である。これらの体験において筆者が行き来した異なる言語とは、①英語と日本語、②アカデミックな言語と、より日常に近い言語、そして③書き言葉と話し言葉である。出版の折にも口頭発表の折にも、筆者は自分の研究や思考を、ふさわしい言語に翻訳したつもりだったが、いずれの場合にも、筆者にとって思いもよらぬ事態が生じた。以下、それらの体験を紹介することで、研究者に典型的な多言語状況がどのようなものかを考察し、その状況下で、そもそも「自分の研究」とは何か、そしてそれを「わかってもらおう」とはどのようなことなのかを考えたい。

何を「わかってもらおう」のか：英語と日本語のはざままで

われわれが「翻訳」という時、もっとも典型的に思い浮かべるのは、ある民族/国民言語で書かれたものを他で書き換える作業だろう。筆者は、民族誌（エスノグラフィ）でこれを行ったことがある。カナダ東部の大学で人類学の博士号を取るために、日本でフィールドワークを行い、英語で学位論文を執筆した後、同論文をイギリスの出版社から英語で、また日本の出版社から日本語で、単行本として発行する機会を得たのである。トピックは、第二次世界大戦後の日本社会において女性文化となった茶道が、それを営む女性たち、および社会にとって、どのような意味を持つかであった。自文化についての「同じ」研究を、英語の学位論文、英語の学術書、日本語の一般書、という順で改編・発表していったわけである。この一連の過程で経験した自文化研究者としての困難は、すでに加藤（2006）で詳しく論じたが、本稿では、多言語状況と

翻訳という視点から、あらためて一点を強調したい。

それは、異なる民族言語で書かれたものは、たとえ同一のフィールドワークに基づいたものであっても、「同じ」研究と言ってよいかどうかはわからない、ということである。言い換えれば、ある研究について複数の言語で書くということは、何かひとつ「わかってもらいたい」研究結果があって、それをまずある言語で「正しく」書き、次に別の言語で「正しく」書く・または翻訳する、ということではない。そうではなく、何を「わかってもらいたい」か自体が、どの言語で書くかによって変わってくるのである。

たとえば英語論文では、基本的に、一文の中では主語と動詞が冒頭に置かれ、一段落の中ではもっとも主張したい一文が冒頭に置かれ、論文全体の中ではもっとも主張したい内容が冒頭の章で提示されなければならない。このような文法および語りの構造はいきおい、発話者に、意見の表明や状況の描写において、シロカクロかはっきりさせるよう迫る（あるいは、このような文法や語りの構造に慣れない筆者が、過剰に反応してしまうのかもしれない。実際、最初に学位論文を持ち込んだカナダの出版社の査読者（英語話者！）から、「議論にシロクロつけすぎ。もっと繊細な議論を」とコメントされたものである）。よって、英語で書いた学位論文、および英語版単行本では、筆者は冒頭で、メインの主張を以下のように明白に述べた。「茶道を営むことで、女性たちは、自らを家族—特に夫や息子の経済資本や文化資本…につりあわせると同時に、臆することなくこれらの資本に対峙することができる (equilibrate themselves with, and at once defies, their family members'—especially husbands' and sons' ...economic and cultural...capital)」(Kato 2004: 3)。

しかし日本語版を編む際には、出版社から、英語とは逆に主張を「最後の方で」「さまざまな議論の一つとして」提示し、読者に「悟らせる」ことを求められた。また語彙の面でも、英文を直訳すると、日本語として堅すぎるだけでなく、女性が男性家族と鋭く対立しているようなニュアンスが出て、読者から共感が得られそうもない内容になってしまう（これは、日本で最初に原稿を持ち込んだ出版社から、断られる際に言われたことでもある）。たとえば上の引用に出てくる *defy* という動詞は、日本語では「公然と無視する」「ものともしない」など数語で言わねばならない意味が凝縮された単語であり、語感も潔い。留学中この単語に出会った時、筆者は感心し、論文のこの箇所でも

迷わず使った。だが日本語の文章では、この動詞をできるだけ原義に忠実に訳したとしても、かえってそのために「日本の夫婦の実情を正確に言い当てていない」ように見えてしまうのである。これは、ものの言い方が、いかにわれわれの実情の認識と一体であるかを示す好例であろう。よって上述の主張は、日本語版では、「[茶道をすることで、女性たちは]夫や子供と肩を並べると同時に、まったく異なる種類の手段をもって自らをエンパワーすることになる」(加藤 2004: 219) という、よりマイルドな表現で、しかも終盤に記した。そして今でも筆者は、英語版の主張と日本語版の主張の、どちらが「本当の」自分の主張なのか、わからない。このように民族誌を書くという作業は、特定言語の影響を免れ得ないのである。

もとより文化人類学者の作業は、少なくとも二つの言語の間を往来する宿命にある。それは「文化の翻訳」と言われるように、フィールドで観察した言語や文化（たいていは研究者にとって異言語・異文化）を、フィールドのそれとは異なる言語（たいていは研究者にとって母語）で報告することから成る。この時、フィールドで得たデータの原義と、翻訳先の言語でのそれらの意味との間に、ズレが生じるのは避けられない（逆に言えば、ズレが生じないなら二者は異文化の関係とは言えない）。そして文化人類学者は、このズレを巧みに利用して民族誌を書いている、と筆者は思う。たとえば筆者のような若輩でも、「茶道」の一般的な英訳が *tea ceremony* であることを利用して、これを文化人類学の「儀式・儀礼」の枠組みで論じることぐらいは思いついた（一方、筆者が出会った二人の茶道修練者は、この英訳を聞いて「えっ、セレモニー？お茶がセレモニーだなんて思ったこともなかった」と、顔を見合わせていた）。

だが、この人類学的言語状況に加え、筆者をめぐる言語状況には、典型的な人類学者にはない特異な点が二つある。まず、研究の最初の目的が、自文化（むろんできる限り異文化として観察したが）を、異文化の人びとに、異言語で報告することだった点である。つまり筆者にとっては、調査に使う言語よりも、発表に使う言語の方がエキゾチックだったのである。この時むろん、論文のある部分は、まず日本語で考えてから英語での表現を探したのだが、他の同じくらい多くの部分は、英語という言語の特殊性に触発されて書いたように思う。上述の、英語の文章に独特の構造、日本語には直訳できない意味や語感を持つ単語などの出

会いと、それらへの驚きや関心が、それらを積極的に使おうという態度につながったのである。その結果、日本語で書いていたら決して思いつかなかっただろうと自分でも思うような議論が生まれたのである。

もう一つ筆者の状況の特異な点は、そうして一度、異言語に翻訳した自文化の考察を、さらに母語に再翻訳したことである。興味深いことに、筆者は当初、自分にとって異言語で書いたにもかかわらず、「英語版の主張の方が本物」だと思っていた。だから日本語版を編む際に、議論の順番や表現を変えることを「本当の主張への裏切り」のように感じていた。だが日本語「訳」をしながらか、徐々に、英語版の論調や表現の欧米臭が鼻につくようになり、積極的に直したりもした（なおここには、もちろん言語の違いだけでなく、読者層の違い—インフォーマントたちを含む「現地の人びと」が、今度は読者の中心となる—も大きく影響している。詳しくは加藤（2006）を参照）。

こうして出来上がった日本語版は、英語版と「同じ」調査に基づいていながらも、翻訳というよりは別の本のように感じられる。そして「何をわかってもらいたいのか」は、二つの本の間では異なる。言い換えれば、それぞれの本を超えたところに、何か中立的な「わかってもらいたいこと」があるかどうかは、筆者自身にもわからないのである。

なぜ「わかってもらえない」か（1）：アカデミックな言語と日常言語のはざま

二つ目の例は、日本語内での多言語状況について考えさせられた経験である。先の出版のケースとは異なり、ここでは筆者には「わかってもらいたいこと」がはっきりとしており、その内容は一つの民族言語、それも母語に支えられていた。そして聞き手も日本語話者だった。にもかかわらず「わかってもらえなかった」のである。2003年、筆者は、お茶の水女子大学において行われた第5回国際日本学シンポジウムの中の、茶道に特化したセッションに、発表者の一人として招かれた。ここでは筆者を含め、専攻は異なるが茶道を研究する四人の研究者が、茶道というトピックを通して、日本文化が海外でどのように認識されているかを論じた。このセッションは一般の人々にも公開された。四人の発表者は壇上に座し、各々が口頭発表をした後、聴衆との質疑応答に入った。

筆者は『ジェンダーをめぐる近現代の茶道言説：欧米と日本』と題して、日本の女性茶道修練者が、日本

の男性知識人からは十分な注目・評価がなされず、海外（筆者が留学していたカナダを中心に）の男女からは誤解される傾向にあることを論じた。前者の傾向の理由として、明治維新以降、男性知識人が西洋から「芸術（art）」概念を導入したことと、女性の「作法」習得の手段の一つとして茶道が教授されるようになったことがあいまって、「芸術としての茶道＝精神的＝男性的」、「作法としての茶道＝身体的＝女性的」という認識が社会に広まり、かつ、「精神は身体よりも高尚」とする西欧的思考の導入が、それら男女の茶道の営みの間に上下関係があるかのような認識を生んだ、という筆者の推測を挙げた。後者の傾向とは、具体的には、筆者が留学中に会った欧米の人びとが女性茶道修練者一般を「ゲイシャ」という言葉で呼んだり、茶道を「ゲイシャのすること（以外の何物でもない）」と誤解していたりすることを指す。筆者はこのような誤解の背景に、19世紀末以来の欧米におけるオリエンタリズム（東方趣味）、そして植民したい土地を女性イメージで語ろうとする傾向を指摘した。同時に日本側も近代以降、芸者を、海外からの来訪者の接客に積極的に活用してきたため、「ゲイシャ」を「女性的なるニッポン」のシンボルとして、欧米と共同作業的に打ち立ててしまったこと、それゆえ現在の市井の女性茶道修練者も「ゲイシャ」と混同されるに至ったのだろうという推測を述べた。

興味深かったのは、筆者の口頭発表の後、聴衆の一人である自称80歳代の女性が、憤然として立ち上がり、筆者を批判したことである。彼女は（その世代の女性としてはもちろん、今日見ても最高レベルの）大学教育を受けた茶道修練者として、自己を紹介した。そして、自分にとって茶道は精神的に意味深いものであると語った。さらには、筆者が、芸者という職業を蔑視する差別論者であると、滔々と批判した。筆者が応答（補足説明）をすると、彼女は一度着席したが、他の聴衆が質問などをした後、再び拳手して立ち上がり、さらに長い時間をかけて筆者を批判した。これに対して筆者は、（実質的な応えはすでに述べたので）社交的な短い返答をした。

この事態を、特殊な一人の聴き手が、特殊な反応をした例として片付けることも可能である。実際、100名近くいたかと思われる聴衆の中で、彼女と同じ批判を寄せる人はなかったし、逆に、筆者がいわれのない批判を受けたとして同情の言葉をかける人さえいた。だが、同情しながらも「あなたの言い方は確かに誤解

を招く」とコメントする人もいた。よって本稿では取
えて、なぜ筆者が「誤解」を招き、「いわれのない批
判」を受けることになったかを、日本語内での多言語
状況という視点から分析したい。

まず考えられるのは、アカデミックな言語と日常言
語のギャップである。この二者は断絶しているわけ
ではなく、後者の上に前者が成り立っており、かつ、後
者から前者への移行は連続的である。たとえば、「お
話」と言えば日常言語だが、「語り」と言えば用法に
よって日常言語にもアカデミックな言語にもなり、さ
らに「言説」(discoursというフランス語からの訳語)
とえば、ほぼ完全にアカデミックな言語である。そ
して各語を使いこなす人の数は、この順で小さくなる。

さて、筆者は、この発表においてできるだけ「言説」
という言葉を選ばなかった。この発表の目的は、男：女、
精神：身体、西欧：非西欧の間の差異と「優劣」を自
然化するような「言説」の批判なのだが、一般公開の
セッションだったため、なるべく「語り」「認識」「イ
メージ」「～観」といった語に言い換えていた（これ
でもまだアカデミックな言語寄りだが）。しかしどう
言い換えようと、筆者が批判したいのは「パワー関係
の中で生まれる、ある特定の傾向を持った、社会の優
勢集団に有利であるような、実態とは異なるレベルで
人の認識に働きかける、発話の総体」といった、フー
コーをはじめ多くの社会科学・人文科学者たちが使っ
てきた、分厚い意味をまとったしるものである。

一方、上述の女性は、自己の学歴と茶道観を述べる
ことで「茶道を営む女性は、精神的に男性に劣ってな
どいない」と主張しているようである。また、「一般
の日本女性が芸者と間違われるのを問題視するのは、
芸者を蔑視している証拠だ。芸者は卑しくなどない」
とも主張しているようである。すなわち彼女は、筆者
が「実際の茶道修練者（の精神性）」や、「実際の芸者
（の貴賤）」を論じていると思っており、その、彼女の
想像上の筆者の議論に対して反論をしているのである。
彼女の憤りは、筆者の原稿から「言説」に相当す
る議論をすべて取り除けば、納得がいく。すなわち彼
女は、筆者がどう翻訳しようと、「言説」にまつわる
議論をすべて跳ばして、自分のわかったところをつな
げて筆者の発表を理解したのである。これは彼女の中
で、筆者が行ったのとは別の種類の、アカデミックな
言語からより日常に近い言語への「選択的翻訳」が行
われた、と言ってよいかもしれない。

あるいは彼女いわく、筆者は「お茶のことがわかっ

ていない」、「今日はお茶の話が聴けると思って来たが、
がっかりした」そうであるから、彼女は、日常言語と
いうよりも「茶道修練者の言語世界」にいたのかもしれ
ない。そうであれば、茶道の話をしているようでい
て、実は社会科学・人文科学の話をしている筆者の発
表は、彼女にとって異言語でなされたことになる。

なぜ「わかってもらえない」か (2) : 書き言 葉と話し言葉のはざままで

この女性に「わかってもらえ」なかったもう一つの
大きな要因は、書き言葉と話し言葉のギャップにある
と思われる。このことは、「あなたの言い方も誤解を
招く」と筆者にコメントした人が、「あなたは芸者、
芸者と言いつぎる」と言った時、ハッと気付いた。実
は原稿では、このキーワードは、すべて「ゲイシャ」
と、カタカナ書きにした上で括弧を付けてあったのだ。
括弧をつけたのは、実在する個々の芸者やその総体と
は関係ない、概念や言説を論じているしるしである。
さらにカタカナで書いたのは、異言語としてこの語を
発話する（ここでは欧米の）人びとにとって、この語
が想起させるイメージを論じているしるしである。つ
まり、「欧米の人がイメージするところの、いわゆる
『ゲイシャ』」を問題にしていることを、ワープロ書き
の原稿では二重に強調していたのだ。だが口頭発表で、
筆者はこの強調をどれほど聴覚化できていただろう
か。原稿を読み上げる際には、英語話者がそうするよ
うに第一アクセント（「ゲ」の部分）を強く発音し、
芸者と区別したつもりになっていたが、そのような微
細な違いに気付く人ばかりではあるまいし、たとえ気
付いたとしても、それによって筆者が何を意図してい
るのかが、ただちに誰にでもわかるわけではあるまい。
よって上述の女性が、筆者が「実際の芸者」について
論じていると思ったのも、故ないわけではないのだ。

このような書き言葉の作法はまた、前節で述べたア
カデミックな言語の作法の一部でもあり、近年の社会
科学・人文科学の書物を読み慣れている人びとの間で
しか、意味をなさない。カナダやアメリカではよく、
口頭発表の際に、本来書き言葉の括弧（“ ”）を表す
ために、両手で蟹のはさみのようなVサイン（指は軽
く曲げる）を作り、顔の両側に掲げるジェスチャー
（あるいは一種の手話）を使う。話しながら、「私は今、
一般の人びとが何気なく使っているこの語を批判的に
見ていますよ」というメッセージを伝えているのであ
る。だが、このジェスチャーないし手話を理解できる

のは、概念批判、言説批判という行為そのものに慣れている、一部の専門家集団だけである（逆に言うと、これを使うと自分もアカデミアの一員であることの証明ないしアピールになる。カナダの大学院で、クラスメートが授業での発言中、ほぼすべての単語を発話する際にこのジェスチャーを添えているのを見て、辟易したことがある）。

いずれにしても、日常言語と連続しながらも隔たった言語、それも著しく書き言葉に偏った言語に習熟しなければならない、という研究者集団の特徴は、注目・自省に値する。この特徴は、研究者が口頭発表をする際にも、そのわかりにくさに加担してしまっていると思われる。この状況でたとえジェスチャーやハンドアウト、パワーポイントなどの視覚言語を使って、書き言葉を視覚化しても、一般の人にとっての「わかりやすさ」が増すわけではない。彼/女たちをますます当惑させるか、逆に、「こんなにわかりやすそうなのだから、自分はわかっているはず」という錯覚を、より抱かせるだけかもしれないのだ。

まとめと結論

以上、筆者の二つの経験を通して、研究者の発話をめぐる多言語状況を考察してきた。英語と日本語で民族誌を出版した経験からは、個別言語を超えたところに中立的な研究結果ないし主張があるとは言えない、という結論に至った。加えて、文化人類学に特有な状況として、ある言語・文化の、別の言語への翻訳があるのだが、この時、原義と翻訳先の言語での意味との間にズレが生じるのは不可避であり、実は人類学者はこのズレを巧みに利用して議論を組み立てていることを述べた。加えて筆者の場合、最初の翻訳先の言語が自分にとって異言語であったため、フィールドで見聞した内容のエキゾチックさよりも、議論に使う言語のエキゾチックさに触発されて書いた感は否めない。だからこそ、後にその議論を母語に再翻訳する際に、違和感を持ち、表現ひいては主張内容を変え、その結果、別の本ともいえるものを編むことになったのである。

次に、一般公開のシンポジウムにて日本語で行った口頭発表の経験からは、主としてアカデミックな言語と日常言語、書き言葉と話し言葉の間のギャップゆえに、研究者が一般聴衆に「わかってもらえない」事態を論じた。こちらは、「同じ日本語」を話す互いに思っているだけに、余計に見えにくい多言語状況である。

これらの議論を俯瞰して言えるのは、「私の研究をわかってもらう」こと、およびそもそも「私の研究」とは何かということ、研究者が、読者/聴衆との関係性をどのようにとらえ、どの言語を選ぶかに大きくかかっている、ということである。

社会科学・人文科学の研究とは、不変の、ゆるぎないロジックで組み立てられた、読者/聴衆とは無関係の思考体系というよりも、ある量のデータと、それに基づいて半ば組み立てられた思考のストック、と考えたほうがよい。そして研究者は、そのうち特定の部分を、誰に対して・どのような目的で発話するかによって、特定の言語に乗せる。この時研究は、その言語ならではの性質の上に、ある特定の仕方編まれ、危ういバランスでかろうじて成り立つ。また別の機会には別の言語の上に、別の編まれ方で、かろうじて成り立つ。こうして研究者と読者/聴衆の間にそのつど立ち現れる研究において、「オリジナル」と「翻訳版」の区別は、常にあるとは限らない。

また「わかってもらう」ことに関しても、重要なのは、研究者と読者/聴衆ひとりひとりとの、そのつどそのつどの関係性なのかもしれない。「研究者の仲間内では専門言語で、一般の方に向けてはできるだけ日常の言葉で」という姿勢は、多くの研究者が実践しているところだろう。たとえそう心がけたとしても限界はあるが、それでも、努力が無駄だとは思わない。なぜなら、選択的翻訳、他人の発話の、自分が「わかる」部分を自分が「わかる」ように理解すること）は日常誰もがしていることであり、それでも人の生活は成り立っているからである。

考えてみれば、たとえ「同じ専門」の研究者同士であっても、互いの研究をどれほど理解しているだろうか。誤解や、いわれのない批判を投げかけあい、「わかる」部分だけを引用しあい、あまりに「わからない」発話をする者がいれば「あいつは頭が悪い」などと評する一方、より小規模な集団において自分と同じ言語を話す相手ほど「優秀」だと認識してしまう。そんな偏りをかかえながら、研究者も、かろうじて互いとながらアカデミアを成り立たせている。その根底には、たとえ部分的であっても、また結局は自分の研究に活用するためであっても、相手の研究を「わかりたい」という意志がある。

同様に、一般の人が研究者の著作を手にとったり、講演に足を運んだりする時、そこには少なくとも「わかりたい」という意志がある。研究者も、「わかって

もらう」ことを願って言語を選ぶ。そこで、ひとりふたり、あるいはそれ以上の読者/聴衆から批判を受けたなら、その批判が意見の相違から来るのか、それとも言語の相違から来るのか、観察する余裕が自分にあるように、と願う。異なる意見を持つ人との、もしかしたら一回限りかもしれない関係性の中で、「私の研究」がより鮮やかに浮かび上がったり構築されたりするように、異なる言語を持つ人との関係性が、「私の言語」の特徴や制約を鮮やかに浮かび上がらせてくれるだろうから。

謝辞

「翻訳」という興味深いテーマで本稿を書く機会を与えてくださった、山口大学の山本真弓氏に感謝いたします。エッセイという形式のため、文中での文献引用は避けましたが、山本氏のご編著(2004)には多くの示唆を受けました。その本を含め、本稿を書くにあたって参考にした主要文献を以下に記します。なお本稿では、通常「外国語」と言うところに「異言語」という言葉を使ってみました。「異なる」ものを指す時にむやみと「国」という語を入れる日本語の傾向に対する、山本氏の批判(2007)を参照してのことです。

参考文献

稲賀繁美編『異文化理解の倫理に向けて』名古屋大学出版会、

2000年。

加藤恵津子「ジェンダーをめぐる近現代の茶道言説：日本と欧米」『第5回国際日本学シンポジウム報告書』お茶の水女子大学大学院人間文化研究科、2003年。

Kato, Etsuko. *The Tea Ceremony and Women's Empowerment in Modern Japan : Bodies Re-presenting the Past*. Routledge Curzon, 2004.

加藤恵津子『〈お茶〉はなぜ女ののものになったか：茶道から見る戦後の家族』紀伊國屋書店、2004年。

—「日本人・ネイティブ・人類学徒：劣等感も選良意識も超えた自文化研究に向けて」『文化人類学』(2006) 71-2 : 202-220頁。

島田信吾「ことばとことばのはざまから：関係性から考える国際日本学」『国際日本学：ことばとことばを越えるもの』法政大学国際日本学研究所編、2007年、189-198頁。

杉島敬志編『人類学的実践の再構築：ポストコロニアル転回以後』世界思想社、2001年。

星野勉「『国際日本学』とは何か：『翻訳』から見えてくるもの」『国際日本学：ことばとことばを越えるもの』法政大学国際日本学研究所編、2007年、199-216頁。

村上陽一郎『科学と日常性の文脈』海鳴社、1979年。

山本真弓「自他の境界の在処と研究者の姿勢」『異文化研究』(2007) Vol. 1:17-27頁。

山本真弓編著、白井裕之・木村護郎クリストフ著『言語的近代を超えて：〈多言語状況〉を生きるために』明石書店、2004年。